

社会的スキルを育む初年次必修科目 「フレッシュマンプログラム」¹

小田部貴子²・最上輝未子³・中川 貴⁴
福岡工業大学・ヘルスコーチ・ジャパン

Enhancing Social Skill through “Freshman Program”

Takako OTABE · Kimiko MOGAMI · Takashi NAKAGAWA
Fukuoka Institute of Technology · Health Coach Japan

福岡工業大学情報工学部情報システム工学科の初年次必修科目として、社会的スキルの涵養をねらう「フレッシュマンプログラム」を設置している。ここで言う社会的スキルとは、自他の考え方や価値観の違いを認め、対人葛藤やストレス状況に遭遇したとしても相手や状況に応じて自己調整しながらその場に関わることができる態度や能力である。本研究では、本科目の授業実践について紹介し、社会的スキルの育成に有効であったかどうかという観点から教育内容を分析・評価した。その主な結果は次の通りである。第一に、本科目の受講前後で、社会的スキル測定の指標としたKiSS-18(菊池, 1988)の得点を比較したところ、受講前に比べて受講後の方が有意に高く、本科目が社会的スキルの育成に有効であることが示唆された。第二に、受講前のKiSS-18の得点によって三つの群に分けて得点の変化を比較したところ、得点の低いあるいは中程度の学生において特に伸びが大きいことが示され、本科目の実施内容が、社会的スキルが比較的低い学生にとって特に効果的であったことが分かった。第三に、授業内容に関する学生の評価や感想について検討したところ、「ストレス」や「自己内対話」などの内面的な思考や感情に焦点を当てた授業内容、及び「偏愛コミュニケーション」が、学生から高く評価されていることが分かった。

[キーワード: 社会的スキル, 対人葛藤, 自己理解, 他者理解, 対人コミュニケーション]

1. 問題と目的

現代社会においては、環境や技術の急速な変化、ものごとの複雑化、価値観の多様化の中で、他者とコラボレーションしながら新たな発想を生み出したりプロジェクトを遂行したりするためのコミュニケーション能力が、強く求められている(例えば、大石, 2011)。また、大学での学びにおいても、他者と協働構成しながら問題解決したり、自他の個性や考えの違いを認め合いすり合わせたりしながらアイデアを創造していくような授業実践(例: PBL; Project Based Learning)がますます重要視されるようになってきている(河合塾, 2010)。

こうした状況の中で、大学での導入教育として、さまざまな形でコミュニケーション能力の育成をねらう授業が注目を集めている。その内容は多岐にわたるが、初年次教育の段階で行われている科目に着目してみると、リテラシーや情報伝達スキルの涵養が中心的な要素である。例えば、グローバル化に対応するための外国語コミュニケーション力の育成(野原・川本・日下部, 2008)、専門的なことがらを分かりやすく説明できるようなプレゼ

¹ 福岡工業大学における科目名称である。

² 福岡工業大学FD推進機構 t-otabe@fit.ac.jp

³ NPO法人ヘルスコーチ・ジャパン mogami@sinikuken.com

⁴ 福岡工業大学情報工学部 nakagawa@fit.ac.jp

ンテーション力の育成(麻生・吉武, 2006), 話し合いながら仕事を進めるための議論スキルの育成(中野・高原・梶原, 2009; 牧野・永野, 2002)といったものである。

しかし, 先述したようなグローバル社会で生き残り, 活躍していくには, リテラシーや情報伝達のスキルのみならず, 自他の考え方や価値観の違いを認め, 対人葛藤やストレス状況に遭遇したとしても相手や状況に応じて自己調整しながらその場に関わることができる社会的スキルの涵養が不可欠である。特に, 現代の学生たちは, 人間関係の希薄化の中で直接的な対人コミュニケーションの経験が少ないままに育ってきており, 社会的スキルが十分に身につけていないとの指摘が多い(例えば, 平澤, 2009; 三宮, 2008)。したがって, 大学の初年次教育の段階で, こうした社会的スキルを補強する科目を設計することには, 大きな意義があると考えられる。

こうした問題意識の下に, 福岡工業大学情報工学部情報システム工学科においては, 1年生前期の必修科目として「フレッシュマンプログラム」を開講している。この科目では, 15回の講義を通して, 対人関係における苦手意識をなくし, 社会的スキルを育成することをねらっている。主な特徴は, 第一に, 自分とはものの見方や考え方・価値観の異なる他者と協働する場を学生に提供するために, 毎回, 組み合わせを変えながら, ペアワークやグループワークを行えるようにしていること, 第二に, 対人関係に苦手意識をもつ学生でも楽しく取り組める課題を意識的に取り入れていることである。

社会的スキルの向上を目指す「社会的スキル・トレーニング」(以下, SST)の研究や実践については, これまでも数多くの報告がある。ただしその多くは, 不登校や攻撃性などの問題を抱えていたり, 発達障害の子どもを対象にしたものである(例えば, 佐藤・佐藤, 2006)。大学生を対象にした SST については, 近年, 社会的不適応の防止や自己啓発を目的として実施され, その効果を検討する研究がいくらかある(例えば, 栗林・中野, 2007)。しかし, 初年次の必修科目において, 社会的スキルの育成に焦点を定めて設計された授業実践を紹介したり, その教育効果について報告したものは, ほとんど見当たらない。

そこで本研究では, 福岡工業大学情報工学部情報システム工学科における初年次必修科目「フレッシュマンプログラム」の教育実践を紹介し, 本科目が社会的スキルの育成に有効であったかどうかという観点から教育内容を分析し, 評価を行うことを目的とする。

2. 「フレッシュマンプログラム」の目的と概要

本科目の主な目的は, 「対人的な苦手意識をなくし, 対人葛藤やストレスに遭遇しても相手や状況に合わせて自己調整しながらその場に関わる態度や能力を体験的に習得させる」ことである。これに必要な不可欠な基本要素は, 自己との対話・他者との対話を通して, 一人ひとりの個性・価値観・考えなどの違いに気づき, それを認めることであると筆者らは考えている。この考えの下に, 本科目は, 自己理解, 他者理解, あるいは人間関係についての理解を, 三つの段階を踏みながら, 徐々に深化させられるように設計した(表1)。第I期は, コミュニケーションのためのウォーミングアップと準備の段階であり, その主な目的は, 講義の意義を理解させ, 対人的な緊張や不安を取り除くことである。第II期は, 対人コミュニケーションの基本原則を理解し, 自他の個性や特徴の違いを体感しそれを認めることの重要性を認識する段階であり, 主な目的は, 自他の行動やコミュニケーションの取り方に焦点を当てながら, 自己理解と他者理解を進めることである。第III期

表1 全15回の講義の構成

	回	テーマ(■)と目標(○) ¹	主要な講義や活動の内容
第Ⅰ期	1-2	<ul style="list-style-type: none"> ■コミュニケーションを始める ○社会が求める人物像とコミュニケーションの力の重要性を理解する ○初対面の人と仲良くなる方法を知り、クラスメイトとのコミュニケーションを始める 	社会が求める人材、コミュニケーションやセルフマネジメントの重要性についての講義/偏愛マップ(齋藤, 2004)を用いたクラスメイトとのコミュニケーション
	3-4	<ul style="list-style-type: none"> ■将来の夢を可視化する ○将来の夢をはっきりと描くための準備をする 	価値観や仕事に対する考え方が書かれたカードを使ったやりたいこと探しのペアワーク/「宝地図」(望月, 2003)(やりたいこと・欲しいもの・なりたい姿などを書き出したり、それらの写真を貼ったりする)の作成
	5	<ul style="list-style-type: none"> ■研究室訪問²の準備 ○研究室訪問の準備をする 	研究室訪問に向けて、礼儀やマナーについて講義/グループで訪問計画
第Ⅱ期	6-7	<ul style="list-style-type: none"> ■コミュニケーションの基本原則 ○コミュニケーションの基本原則と「相手に分かりやすい伝え方」の基本的なルールを学ぶ 	非言語情報(表情, 視線, 距離)による感じ方の違いを体験するペアワーク/言語情報のみで正確に情報を伝えるグループワーク
	8-9	<ul style="list-style-type: none"> ■コミュニケーションの違いを体感する ○コミュニケーションの取り方の違いを体感し、自分の傾向やクセを自覚する ○自分と違うスタイルの人の傾向や特徴を知り、相手に合わせた関わり方ができるようになる 	四つのコミュニケーションスタイル(最上, 2011)にグループ分けし、グループごとに自分たちの「コミュニケーションの特徴」や「動機づけを高めるポイント」をテーマとしたディスカッション。話し合った内容を模造紙にまとめてクラス全体の前で発表
第Ⅲ期	10-11	<ul style="list-style-type: none"> ■セルフマネジメント: ストレスコントロール ○ストレスの仕組みについて学び、自分の状態が分かるようになる ○ストレスとうまくつきあう方法を知る 	ストレスに関するグループディスカッション。話し合った内容を模造紙にまとめてクラス全体の前で発表/「気がかり・ストレス」をリストアップする個人ワーク
	12	<ul style="list-style-type: none"> ■セルフマネジメント: 内側のコミュニケーションを整理する ○無意識のうちに行っている「内側のコミュニケーション」を整理して、感情コントロールができるようになるための準備をする 	外側のコミュニケーション(自分が対外的に行なっているコミュニケーション)と内側のコミュニケーション(自己内対話として行なっているコミュニケーション)の違いや自分が持っている枠組みについての講義、及び個人ワークとグループディスカッション
	13	<ul style="list-style-type: none"> ■研究室訪問の振り返り ○グループの仲間とともに研究室訪問について互いに報告しあい、受け取り方の類似性や差異について認識する 	異なる研究室を訪問したメンバーから成るグループをつくり、研究室訪問について互いに実施内容、感想、印象などについて報告。さらに、共通の体験、訪問班や研究室による違い、個人による受け止め方や受け取り方の違いなどについてディスカッション。気づいたことを模造紙にまとめてクラス全体の前で発表
	14	<ul style="list-style-type: none"> ■セルフマネジメント: 境界と人間関係 ○相手との距離を適切に保ち、心地よい人間関係を作るためのトレーニングをする 	自分や他者がもっている心理的・物理的境界について、講義、及びグループディスカッション
	15	<ul style="list-style-type: none"> ■講義の振り返り ○15回の講義を振り返る 	課題の提出/振り返り用のワークシート記入やアンケートへの回答

¹ この講義での具体的な到達目標として、学生に提示したのは次の五つであった：①自分について理解し、キャリア形成につながる人生の目標設定をする、②クラスメイトの過半数と知り合いになり、複数の教員とのふれあいを経験する、③コミュニケーションの基本原則を理解し、他者に分かりやすい伝え方を身につける、④自分の個性やコミュニケーションの傾向を知り、他者との違いを受け入れられるようになる、⑤課題へのチームでの取り組みを通して、チームコミュニケーション力を身につける。

² 研究室訪問は、学科に在籍している教員と交流することを通して、専門分野や研究について知ることやマナーと敬語について実践的に学ぶことを目的として設定されたものであり、具体的な内容としては、自分たち自身で教員にアポイントメントを取り、グループで二つの研究室(教員)を訪問して、教員から話を聞くというものであった。

は、対人コミュニケーションにおける葛藤やストレス場面について考えを深める段階であり、主な目的は、見えにくい内面的な思考や感情に焦点を当てながら、自己理解と他者理解をさらに深め、自分に合った対人葛藤やストレスに対処する方法を習得することである。

なお、本科目において、次の二つを毎回の講義で行った。一つは、「偏愛コミュニケーション」である。これは、講義のアイスブレイクとして役立てると同時に、他者との会話に慣れ、コミュニケーションが苦手な人にも、自己紹介をしたり自分を表現する機会を与えることをねらって行ったものである。その方法は、クラスメイトとペアになり、作成した偏愛マップ(齋藤, 2004; 紙に好きな食べ物・趣味・タレントなど、自分の好きなものをキーワードとしてできるだけ具体的に書き出したもの)を交換して、互いにそれを見ながら8分間会話をするというものである。毎回、順次二人の新しい相手とペアになって行い、半期かけて半分以上のクラスメイトと知り合えるようにした。もう一つは、「フレッシュマンプログラム振り返りシート」の記入である。これは、自分の状態について把握し自己理解や学びを深めさせることをねらって行ったものであり、毎回、講義開始時に「この1週間の自分の生活について」、講義終了時には「本日の授業の振り返り」を、それぞれ5分程度で記入させた。

3. 「フレッシュマンプログラム」の教育効果

(1) KiSS-18 を用いた効果測定

本研究では、「フレッシュマンプログラム」の教育効果を把握するために、科目受講前と受講後に、Kikuchi's Social Skill Scale (KiSS-18; 菊池, 1988)を用いて学生による自己評定を行わせ、これらの得点の比較・検討を行なった。この尺度は18項目からなり、例えば、会話のスキル(例:「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」)、葛藤処理のスキル(例:「まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか」)、関係調整のスキル(例:「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」)などが含まれる。「ここ1ヶ月間(本科目受講後は「現在」とした)のあなたの人との関わり方についてうかがいます。以下の文を読んで、今の自分に当てはまると思う数字に○印をつけてください」と教示し、それぞれの項目について、1「いつもそうでない」～5「いつもそうだ」の5件尺度で評定させた。なお、受講前後で得点を比較するために、記名式で実施した。

(1)-1 KiSS-18 の得点の変化

本科目の受講前と受講後の両時点において、効果測定用の質問紙調査に回答した1年生88名を分析の対象とした。KiSS-18 についての受講前後における信頼性係数 α はそれぞれ .88, .86 であり、十分に高い値であった。 t 検定により受講前後で得点を比較した結果、受講前に比べて受講後の評定平均値が有意に高かった ($t(87) = 7.31, p < .01$; 受講前 $M = 2.69$ ($SD = .78$), 受講後 $M = 3.16$ ($SD = .71$))。この結果は、本科目が社会的スキルの育成に有効であることを示唆するものである。

(1)-2 受講前の社会的スキルの得点と本科目の教授効果の関係

ここでさらに、本科目がどのような学生に特に有効であったのかをより詳細に検討するために、受講前の KiSS-18 の得点により受講生を低群 ($M = 2.3, SD = .29; n = 29$), 中群 ($M = 2.9, SD = .11; n = 28$), 高群 ($M = 3.6, SD = .35; n = 31$) に3等分し、それぞれの群の得点が本科目の受講前後でどのくらい変化したかを比較した。その結果、図1に示すように、低群及び中群

における変化が大きいことが分かった。なお、統計的にも、低群・中群は、受講前後に有意差(順に、 $t(28) = -7.45, p < .01$; $t(27) = -5.91, p < .01$)が見られるのに対して、高群では有意傾向($t(30) = -1.72, p < .10$)に留まった。高群における上昇があまり見られなかったことへの解釈の一つとしては、受講前の時点で得点が高いことによって、受講後にそれよりも高い得点をつけることが困難であるという天井効果が考えられる。しかし少なくとも、本科目の実施内容が、社会的スキルが低いないしは中程度の学生に対して特に効果的であったことが示唆されたといえる。

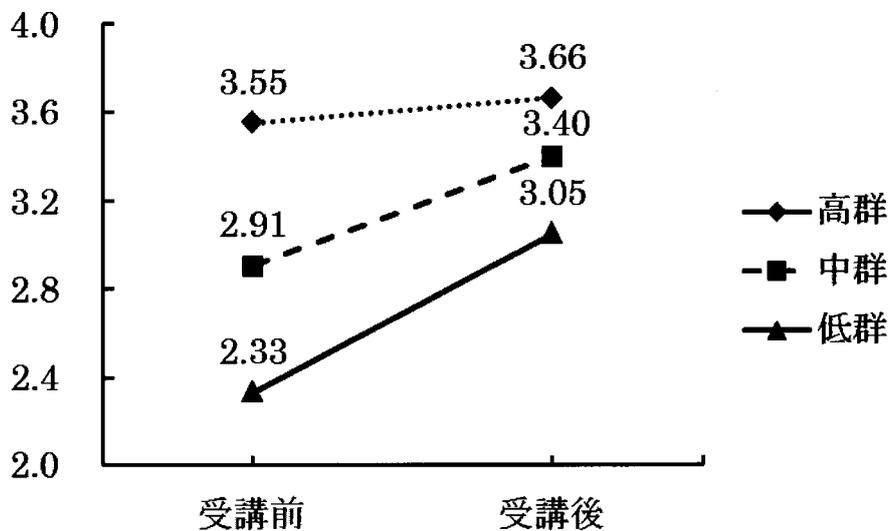


図1 受講前後における KiSS-18 の得点の変化

(2) 学生の感想

本研究ではまた、「フレッシュマンプログラム」における問題点の解決や、教育改善のために、学生に「コミュニケーション力の向上に役立った授業内容」および「本科目の感想」についてのアンケートを行って回答を得た。回答者は最後の講義に出席した 88 名であった。

(2)-1 コミュニケーション力の向上に役立った授業内容

学生にとってどういった授業内容が特に役立つのかを把握するために、「コミュニケーション力を向上させるために役立ったと思う授業内容に○をつけてください。(複数選択可)」と教示し、表 2 に示す選択肢を用意した。集計した結果、「b. 偏愛コミュニケーション」が役立ったと回答した人の割合は 92.0%と顕著に高く、これ以外では「h. 分かりやすい伝え方(50.0%)」「i. コミュニケーションスタイル(46.6%)」「j. ストレスについての勉強(55.7%)」「k. 内側のコミュニケーション(枠組み)の勉強(48.9%)」「l. 境界と人間関係についての勉強(56.8%)」などが 5 割前後の学生に支持されており、比較的、評価が高い内容であったことが分かった。

ここで、先に分類した受講前の社会的スキルの得点(低・中・高群)によって、役立つ授業内容や課題に関しても何らかの違いが見られるかどうかを明らかにするために、特に評価の高かった上記六つの授業内容において、「役立った」と回答した人の割合を比較した(表 3)。それぞれの授業内容や内容ごとにカイ 2 乗検定を行なったところ、「j. ストレスについての勉強」「k. 内側のコミュニケーション(枠組み)の勉強」の 2 項目は、「役立った」と

回答した(項目を選択した)人の割合は中群では高く、高群では低い傾向があることが示された(順に、 $\chi^2(2)=7.96, p<.05$; $\chi^2(2)=5.04, p<.10$)。その他の授業内容については、どの群においても「役立った」と回答した人の割合に有意な差は見られなかった。この理由を明確に結論づけることはできないが、中群($M=2.9$)はある程度の社会的スキルがあるがしばしば他者との葛藤やストレスへの対処の仕方、スキル不足に悩んでおり、そうした問題を解決したいという欲求と合致した可能性がある。

表2 コミュニケーション力を向上させるために役立った授業内容や課題(n=88; 複数選択可)

授業内容や課題	選択した人数	全体に占める割合(%)
a. 振り返りシートの記入(毎回)	22	25.0
b. 偏愛コミュニケーション(毎回)	81	92.0
c. カードでやりたいこと探し(第3回)	14	15.9
d. 宝地図作成(第4回)	20	22.7
e. 研究室訪問(第5回; 敬語・訪問・E-mail マナーの勉強)	39	44.3
f. 研究室訪問(グループ活動そのもの)	36	40.9
g. 研究室訪問の振り返り(第13回)	14	15.9
h. 分かりやすい伝え方(第7回; 図を伝えるワーク)	44	50.0
i. コミュニケーションスタイル(第8,9回; 多様性を知る勉強)	41	46.6
j. ストレスについての勉強(第10,11回)	49	55.7
k. 内側のコミュニケーション(枠組み)の勉強(第12回)	43	48.9
l. 境界と人間関係についての勉強(第14回)	50	56.8

表3 受講前における社会的スキルの得点と選択した授業内容や課題との関係

授業内容や課題		低群	中群	高群
b. 偏愛コミュニケーション	選択あり	27	23	29
	選択なし	2	5	2
h. 分かりやすい伝え方	選択あり	12	16	14
	選択なし	17	12	17
i. コミュニケーションスタイル	選択あり	13	13	14
	選択なし	16	15	17
j. ストレスについての勉強	選択あり	17	20	11*
	選択なし	12	8	20
k. 内側のコミュニケーションの勉強	選択あり	13	18	11†
	選択なし	16	10	20
l. 境界と人間関係についての勉強	選択あり	15	18	16
	選択なし	14	10	15

注) * : $p<.05$, † : $p<.10$

(2)-2 本科目の感想についての自由記述

本科目の感想については、「フレッシュマンプログラムの中で、記憶に残ったこと、よかったこと、楽しかったこと、今後も続けてほしいことなど、あなたの感想を自由に書いてください。」と教示し、自由記述形式で回答を得た。その結果、記述が多く見られたものは「偏愛コミュニケーション」についてであった。例えば、「共通の趣味を持っている人は

その話題で盛り上がり、すごく仲良くなり、初めてしゃべる人でも、すごく仲良くなれた」といった感想が記述されており、「偏愛コミュニケーション」が多くの学生にとって楽しめるものであり、実質的な友達づくりやクラスの良い雰囲気作りに資するものとなっていることが分かった。その他としては、研究室訪問、第 III 期に行った各授業内容、そして科目全体のことについて、「楽しかった」「良かった」「ためになった」など、概ね本科目に対するポジティブな意見が記述されていた。

(3) 教育効果についてのまとめと考察

本科目の教育効果に関して、主な結果を整理すると、次のようになる。第一に、本科目の受講前後で、社会的スキル測定の指標とした KiSS-18(菊池, 1988)の得点を比較したところ、受講前に比べて受講後の方が有意に高く、本科目が社会的スキルの育成に対する一定の効果があることが認められた。第二に、受講前の KiSS-18 得点によって三つの群に分けて得点の変化を比較したところ、得点の低いないしは中程度の学生において特に伸びが大きいことが示され、本科目の実施内容が、社会的スキルが比較的低い学生にとって特に効果的であったことが分かった。第三に、授業内容に関する学生の評価や感想について検討したところ、「ストレス」や「自己内対話」などの内面的な思考や感情に焦点を当てた授業内容、及び「偏愛コミュニケーション」が、学生から高く評価されていることが分かった。

本学で対人関係に苦手意識や抵抗感をもつ学生が多く見受けられることを鑑みれば、「フレッシュマンプログラム」の果たす役割は大きい。というのは、対人関係に苦手意識をもつ個人は一般的に、他者との付き合いに関するネガティブな経験やイメージを持っており、そうした経験やイメージがあるからこそ、対人コミュニケーションに対して消極的になる。消極的になることで対人スキルを獲得する機会を逃しやすくなる。すると今度は、スキルがないために実際の対人コミュニケーションがうまくいかず、ネガティブな経験やイメージが膨らんでいく、という悪循環に陥っていることが多い(小田部, 2010)。「フレッシュマンプログラム」の設計における工夫や配慮(例えば、①安全感も保証できる状態をつくった上で必然的なコミュニケーションの場をつくる、②行動面から内面的な側面へ目を向けさせるようにスモールステップを踏みながら無理なく知識を深めさせる、③体験と演習を組み合わせて取り入れ、重要性や効果を実感しながら学ばせる)が悪循環を予防し、むしろ個人やクラス全体を好循環に導いたのではないだろうか。ここでいうクラス全体の好循環とは、本科目を通して段階的にコミュニケーションや社会的スキル獲得の場が提供されることで、個々の学生が対人コミュニケーションやクラスに対するポジティブなイメージを持ち、それによってクラス内での実質的なコミュニケーションも増加する。それが、仲間と学びを深める経験となったり、新たなスキル獲得の場となるため、さらにポジティブなイメージを持って活動を展開できるというサイクルである。ただし、以上は筆者らの解釈であり、「フレッシュマンプログラム」を通してこうした現象が学生個人あるいは集団全体の中で実際に起こっていたかどうかについては、今後、更なる実践と研究を通して検証していく必要がある。

4. 今後の課題

今後の課題として、次の三つを挙げることができる。第一に、上記の「役立った授業内

容」のアンケートにおいて、比較的選択されなかった授業内容や課題については改善する余地がある。特に、目標設定に関するものや振り返りシートは、自己管理能力の育成や学びにおける振り返りを習慣づけるものであり、初年次教育としては非常に重要な意味がある。第二に、もともと対人コミュニケーション力の高い学生に対しても役立ったと思えるような授業内容や課題(例：アサーション)を取り入れていく試みも望まれる。第三に、上記の第一、第二の課題に取り組むためには、学生の社会的スキルが今どのような状態にあるのか、さらには授業や日常生活の中でどのようなプロセスを経て成長していくのかといった側面を、定量的・定性的な研究・分析を通して、より詳細に把握していくことが重要である。

参考文献

- 麻生稔彦・吉武 勇 (2006) 「ものづくりを利用したコミュニケーション教育」『平成 18 年度工学・工業教育研究講演会講演論文集』, 300-301.
- 平澤孝一 (2009) 「自己一致—教職員が「学生に関わる体験」から—」『大学と学生』, 69, 2-9.
- 河合塾 (編) (2010) 『初年次教育でなぜ学生が成長するのか—全国大学調査からみえてきたこと—』東信堂
- 菊池章夫 (1988) 『思いやりを科学する』川島書店
- 栗林克匡・中野 星 (2007) 「大学生における社会的スキル・トレーニングの成果と評価」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』, 44, 15-26.
- 牧野由香里・永野和男 (2002) 「表現・コミュニケーション能力の育成のためのスピーチ演習カリキュラムの開発」『日本教育工学雑誌』, 25(4), 225-235.
- 最上輝未子 (2011) 『怒ってばかりの子育てが変わるコーチング』PHP 研究所
- 望月俊孝 (2003) 『幸せな宝地図であなたの夢がかなう』ゴマブックス
- 中野美香・高原建爾・梶原寿了 (2009) 「電気系学生のコミュニケーション能力の育成を目的とした教育設計」『電気学会論文誌 A (基礎・材料・共通部門誌)』, 129(5), 379-385.
- 野原佳代子・川本思心・日下部治 (2008) 「グローバルエンジニアの人材育成に向けた東京工業大学における国際化教育の試み」『工学教育』, 56(4), 114-122.
- 齋藤 孝 (2004) 『偏愛マップ』NTT 出版
- 佐藤正二・佐藤容子 (編) (2006) 『学校における SST 実践ガイド』金剛出版
- 三宮真智子 (2008) 「コミュニケーション教育のための基礎資料—トラブルに発展する誤解事例の探索的検討—」『日本教育工学会論文誌』, 32, 173-176.
- 大石加奈子 (2011) 『エンジニアリング・ファシリテーション』森北出版
- 小田部貴子 (2010) 「『日常型心の傷』による、自己観、他者観、世界観の歪み」 丸野俊一・小田部貴子 (編) 『「日常型心の傷」に悩む人々(現代のエスプリ, No. 511)』ぎょうせい, 129-141.